

「勝瓜頭首工」から始まる地域農業の展開

— 栃木県真岡市 —

栃木県芳賀農業振興事務所 田 巻 恒 河

1. はじめに（地域の概要）

表紙写真は、栃木県を流れる一級河川鬼怒川に架かる勝瓜頭首工になります。

この頭首工は、国営鬼怒川南部土地改良事業（昭和40～50年）により造成された施設です。この事業は栃木県真岡市、小山市、茨城県古河市、結城市、下妻市、常総市、筑西市、坂東市、八千代町の2県8市1町8,805 haにまたがり（図-1）、鬼怒川の南端部東西約20 km、南北約50 km、利根川合流点を含む平坦な洪積台地と細長い谷地および河川沿いで、東は五行川や小貝川まで、西は田川や飯沼川までの地域を受益としています。

本地域は、水源のほとんどを鬼怒川に依存し、勝瓜、大井口、江連の3用水は自然取入れ、伊讃美用水等はポンプ揚水により水を供給しています。

これらの各用水はいずれも老朽化が進んでおり、加えて近年の急速な河床低下、気候変動等に起因する渇水などにより、取水が困難な状況が増えており、安定

的な営農活動には、多大な管理労力を投じている状況です。

このことから、令和2年から国営施設応急対策事業「鬼怒川南部地区」として、施設の機能を保全するため、揚水機や農業用水路の更新整備を行っているところです。

2. 受益地の営農状況と展開

本地域の営農は水稻を中心としつつ、水田の畑地利用も盛んで、麦や露地野菜、施設園芸などが展開されています。今回は、栃木県の状況を紹介します。

栃木県内の受益地は、平坦で広大な農地が広がっていることから、近年、大規模経営体への農地集積が進んでいます。

県では、省力化を図るために、スマート農業機器の性能を十分発揮する大区画化基盤整備や農地中間管理機構を活用した農地の集積・集約化等を推進することで、経営面積100 haを超える大規模土地利用型経営体の育成を進めるとともに、需要の高い加工・業務用露地野菜の大規模な産地育成、畜産農家との耕畜連携を推進し、有利な土地条件を活かした高収益型農業の展開を進めています（写真-1）。

特に、県では「園芸大国とちぎづくり」のキャッチフレーズを掲げ、水田を活用した露地野菜の生産拡大を推進しています。



図-1 勝瓜頭首工の主な受益地



写真-1 畜産農家の飼料生産の状況



写真-2 レタスのトンネル栽培



写真-3 トンネル内のレタス栽培



写真-4 たまねぎ栽培

この地域では、レタスやたまねぎを水稻・麦との輪作で取り組むケースが多く、JA 部会などと連携して、園芸作物の生産拡大を推進しています（写真-2～4）。

また、栃木県の代名詞となっている「いちご」についても、この地域で多くの生産者が活躍しています。

芳賀地域のいちごは、昭和 32 年の栽培開始以降 68 年以上の歴史があり、生産量日本一として本県の園芸

生産を牽引してきました（写真-5）。

今後、さらに産地として発展させるため、「芳賀地域 115（いい・いちご）戦略」に基づき、JA 販売金額 115 億円を目標に掲げ、幅広い年齢層の活躍を目指す「担い手の確保・育成」や、新品種「とちあいか」への転換、収量・品質の安定を図る技術確立、交流人口の拡大を図る「いい・いちごの郷づくり」に取り組んでいます。



写真-5 いちごハウスの様子

3. おわりに

この地域の農業水利施設は、昭和 40～50 年代に造成されたものが多く、ポンプの電動機の故障や老朽化に起因する送水路や用水路の漏水等、施設の機能低下が生じていますが、管理者の土地改良区は財政的にゆとりがない状況です。

また、気候変動に伴う自然災害が頻発化・激甚化する状況下においては、現在実施している国営事業に加え、きめ細かな施設の長寿命化対策や防災・減災対策、管理組織の運営基盤強化推進を併せ行うことで、農業用水の安定的で継続的な供給を図らなければなりません。

農業をとりまく情勢は不確実で厳しいものが多く、問題・課題が山積していますが、表紙写真のような何事もなく穏やかな日々が繰り返され、農業者が安心して地域の特徴に応じた農業を展開できることが、農業行政に携わる者たちの役割であり、喜びであると再認識しています。

参考文献

- 1) 栃木県芳賀農業振興事務所：芳賀地方の農業・農村（2024）
- 2) 関東農政局鬼怒川南部農業水利事業所：鬼怒川南部農業水利事業竣工図集、公共事業通信社（1976）
- 3) 関東農政局鬼怒川南部農業水利事業所：国営鬼怒川南部土地改良事業計画概要書（2019）